

Bulletin of the Institute of Buddhist Culture
of Tsurumi University
No. 20, 2015

鶴見大学仏教文化研究所紀要 第二十号 抜刷
平成二十七年三月三十一日 発行

『金七十論私記』の検討

興津
香織

『金七十論私記』の検討

鶴見大学仏教文化研究所所員 興津 香織

一、はじめに

インドにおいて、アーリア人侵入以降定着していったバラモン階級による思想的支配・統制に対し、反対の立場を唱えて成立した仏教にとって、伝統的なバラモンの哲学たるインド正統哲学は常に批判の対象であった。正統哲学六派の中でも特に、サーンキヤ学派（三元論）とヴァイシエーシカ学派（多元論）は、仏典において引用・批判されることが多く、この二学派の注釈書である『金七十論』（真諦訳）と『勝宗十句義論』（玄奘訳）だけが梵語原典から漢訳され、ほとんどの大蔵経に収録されていることから、両派に対する仏教側の関心は非常に高かったと考えられる。

しかし、インドおよび漢訳された地である中国の仏教界では両者を批判するものの、深く学べば逆に仏法を惑わす外道として避けられ、その思想全体に対する思索がなされることはなかったようである。

日本においても仏教伝来以降そのスタンスが保たれていったが、江戸時代に突如として多数の著名な学僧により両派の本格的な思想研究が、先の漢訳注釈書に対する注釈研究という形で開始された。日本仏教史上、この思索が確認されるのは、現在のところ、『金七十論』が元禄十年（一六九七）に単行出版された後の二百年ほどの間のみである。まさにその時期は江戸時代の代表的な学僧を大量に輩出した仏教研究の最盛期と重なっていることから、仏教研究のみならず仏教外の書の研究までも行うことのできる能力と余裕を持ち合わせていた、いわば仏教研究の黄金時代とでもいえるべき時であったといえよう。

しかし今日まで『金七十論』の注釈書に関する研究はほとんど無く、これまで知られていた注釈書は数点であった。改めて行った筆者の調査によって、散逸したものを含めて二十六点、作者は十七人に上ることが判明している。^①

また、注釈書の作者には「天明の三哲」と称される真言宗豊山派の智幢法住や林常快道、そして様々な宗派の第一級の学僧たちが名を連ねていることから、当時の仏教界への影響は無視できないものがあつたと考えられる。

このような研究状況の中で筆者は、これまで目録上に名称が挙げられているのみで、未詳の書とされてきた林常快道による『金七十論私記』と思われる写本に行き当たつた。

本稿では、これまで全く未詳の書とされてきた『金七十論私記』と思われる写本について、作者の問題も含め厳密に検討し、江戸時代における『金七十論』研究の全容を解明するための布石としたい。

二、快道とその著作——『金七十論』注釈書の位置付け——

豊山派の快道は宝暦元年（一七五一）に上野国勢多郡に生まれ、同郡の相応寺において快音に従つて出家、得度し、長じて豊山長谷寺で学び密教、唯識、俱舍等に通じた。豊山性相学の泰斗といわれる。一七八一年に『六合釈精義』一卷を著して法住著『分別六合釈』の説を非難して法住の怒りを買ひ、高野山に移つて学んだ。その後、一八〇二年に武蔵浦和玉蔵院に移り、江戸伝通院などに招かれて講義をした。一八〇九年に江戸（湯島）根生院に移る（江戸根生院第一代）。「江戸第一の碩学」と称される。文化七年（一八一〇）、同院にて寂す。快道の墓は現在元浅草の観蔵院にある。^②

著作は自身の宗派に関するものはもちろん、仏教外の注釈書など多岐にわたっている。中でも『俱舍論』に対する注釈書が多く、他には因明や八転声や六合釈に関する研究している。筆者の注目する仏教外の注釈書としては『金七十論藻鏡』^③（二巻）、『金七十論疏』^④（二巻）、『金七十論私記』^⑤（二巻）、『金七十論高稱記』^⑥（二巻）、『勝

宗十句義論決擇』(五卷)、『勝宗十句義論叢林』(一卷)、『勝宗十句義論聞書』(一卷)、『十句義論決擇』(五卷)等があり、サーンキヤ(『金七十論』)だけでなくヴァイシエーシカ派の『勝宗十句義論』に対する注釈書も書かれている。

快道の『俱舍論』に対する注釈書を見ると、本文に言及されたサーンキヤ説に注釈を施す際に『金七十論』の記述を使用している。それ以外にも『光記』等における誤った解釈を仏典のみならず、『金七十論』といったインド哲学側の知識や八転声や六合積の知識を駆使して厳密に検討するのが彼の特徴である。性相学において受け継がれてきた玄奘の理解するサーンキヤ説を、従来伝統的になされてきたようにそのまま踏襲するのではなく、真諦訳『金七十論』というおおもとのテキストにまで立ち返って理解を深めるべきであるという研究姿勢が『金七十論』研究へと発展していったのではないだろうか。⁴⁾

三、『金七十論私記』について

快道の『金七十論』に対する注釈書の中で、『金七十論藻鏡』(以下『藻鏡』と略す)はよく知られ、写本も数点存在し、『日本大蔵経』⁵⁾に活字翻刻されている。

しかし、その他の注釈書についてはこれまで目録上の記述のみで未詳の状態であった。

『金七十論疏』と『金七十論私記』については、『埼玉名家著述目録』⁶⁾と『続豊山全書 解題』⁷⁾に、快道の著作として「『金七十論疏』二卷、『金七十論私記』一卷」とあり、両目録とも『豊山小史』⁸⁾の記述によっている。

また『金七十論高稱記』に関しては、『続豊山全書 解題』⁹⁾に「所在が本山である」とのみ書かれている。『続豊山全書』「金七十論疏解題」によると

快道『金七十論高稱記』二卷 天明六年（一七八八）写本

法住の講録を用いているように附題があるが、内容的には『藻鏡』と『（金七十）論疏』とを合本にしたもので、統一ある注釈書の一つという訳ではない。¹⁰

とされる。法住にも『金七十論疏』なる著作があり、快道の『金七十論疏』は現在確認出来ず、どちらの『疏』であるのか判然としないという問題もまた別に存在する。

上記のような状況の中、筆者は龍谷大学所蔵の写本に行き当たった。題箋に『金七十頌因明合本』とあり、その文字の上に「二十五諦記」「藻鏡」「私記」と墨書されている。

この『金七十頌因明合本』は快道の『藻鏡』から始まり、『金七十論私記』（以下『私記』と略す）と思われるもの、『金七十論頌』（『金七十論』の頌のみを集めたもの）、『数論二十五諦略図』、『数論二十五諦記』を合本にしたもので、『藻鏡』と『数論二十五諦略図』は快道の作と記述があり、それ以外のものは作者が書かれていない。その中の『私記』と思われるものには奥書があり、明治十年（一八七七）に了諦という豊山の学僧が書写した、ということになっている。『藻鏡』と『私記』は同じ字と判断できるので了諦の書写とひとまず考え、それに続く『金七十論頌』、『数論二十五諦略図』、『数論二十五諦記』の中で、『数論二十五諦略図』は了諦の字に近い。この『略図』は『大乘義章』において言及されたサーンキヤ説を参考にして二十五諦の分類を図にしたもので、最後に「快道師記」とある。

残りの『金七十論頌』と『数論二十五諦記』は了諦の字と異なっており、それぞれ違う字体である。書写した了諦については判然としないが、書写年代から考えてこの合本が成立したのは『私記』が了諦によって書写されたとする明治十年より後のこととしてよいのではないか。

かつて筆者が明らかにしたように^①、この合本の『数論二十五諦記』は実際には快道が著したものでなかった。『数論二十五諦記』には作者や奥書などの情報は一切ないために、後世の人が内題の『数論二十五諦記 解俱舎光記』を見て豊山性相学の泰斗、快道の作と判断し合本にしたのではないかと考えられている。よって作者の記述がない『私記』についても快道によるものかどうか検討する必要がある。

四、『私記』の検討（一） 構成の特徴

『私記』には題名も作者の記述もなく、『金七十論』の第一頃の引用から始まっている。偈文に対してだけでなく、長行の部分についても注釈を施していくスタイルである。快道が『藻鏡』において引用する暁応嚴蔵^⑫（一七二四～一七八五）の『金七十論備考』^⑬（以下『備考』と略す）や法任^⑭（一七二三～一八〇〇）の『金七十論疏』^⑮（以下『疏』）、香山宗朗^⑯（？～一七八八）の『金七十論解』^⑰（以下『解』）と、そのスタイルを比べてみると、『備考』と『疏』はサーンキヤ哲学と『金七十論』に関する概説（序論に相当する）と『金七十論』の各偈文及び長行部分に対する注釈（本論）との二部構成となっており、『解』は序論に続いて『金七十論』の中の個々のことばに注釈を加える形をとった書である。

他方、『藻鏡』は偈文等に対する注釈書ではなく、サーンキヤ哲学と『金七十論』に関する概説を仏典の資料に基づいて文献学的に検討した著作である。快道の製作意図を読み取ることが出来ないが、偈文等の注釈書である『私記』を本論の部分、『藻鏡』を序論とみなすことも可能であろう。

『私記』は第一頃から長行の文言の細かい部分にまで注釈を施しているが、残念なことに第三頃の手前でぶつくりと途絶えている。一紙当たり十行、一行二十文字、全十六丁しか残っていない。その奥書には以下のようにある。

已上快道師私記惜哉已下不全義而還本家給也

于時明治十年二月快師以置書寫得者也

豊山苗学釈沙門了諦書

書写者の了諦が「快道師の私記」と記したことにより、ひとまずこの十六丁を『私記』と見なすことは出来るが、この『私記』の前の部分にある『藻鏡』（文字から判断するに、これも同じ了諦が書写）には題名と作者が明記されている。先に言及した通り、快道によつて書かれたと考えられていたから合本にされた可能性のある『数論二十五諦記』も、実は快道の作ではないことが判明している。よつて、この題名も作者も書かれていない『私記』なるものは快道の作と見なしてよいのであろうか。以下、具体的に検討していきたい。

五、『私記』の検討（2） 快道『藻鏡』との類似点

先にも触れたように、『藻鏡』には『備考』『疏』『解』についての言及・引用が見られることから、それらを参照していることは明らかである。殆どの場合、それらの説を批判しているのであるが、ここで興味深いのは、快道は『藻鏡』において『備考』と『解』についてはそのまま『備考』、『解』と記述するのに、法住の『疏』に言及する際には「有人」としか書かない点である。

『私記』においても同様に『備考』『疏』『解』に言及しており、同様に『備考』、『解』、『有人』を用いている。実際にこの「有人」が法住かどうか、言及のある三方所について検討してみたい。

①『金七十論』第一頌^⑮の長行中に「外曰此婆羅門欲知從何因生^⑯」とある。

これは、サーンキヤ学派の開祖である迦毗羅（カピラ）尊者が盲闇に沈み込む世間を見て慈悲の心を起こし、阿修利（アースリ）という一人の婆羅門にサーンキヤの教えを授ける事にしたが、そのためには三度の対話が必要であった。一度目と二度目の時にはアースリはバラモンの祭祀で満足しており、苦を感じていなかったのである。三度目にしてアースリに苦を退けるための原因を知りたいという望みが生じたのはどうしてかという問いの部分に対する注釈である。

「快道はアースリに生じた「願欲心」を「欲発の因果」として次のように説明する。

欲発ノ因果謂ク逼惱難レハ堪発ス下求_ル除_レ彼因_ヲ之心_上是逼惱_ヲ為_レ因而欲発ノ果生ス（『私記』²⁰）

三苦に逼られるのが耐え難くなったので、その原因を取り除きたいという心が生ずる。この三苦に逼られることを（原）因となして、それを取り除きたい心（果）が結果として生ずるのである、と解説する。先の長行（「此婆羅門欲知從何因生」）の続きの部分に「答曰三苦所逼故」とあって、快道の見解は正しい。

上記に続いて快道は次のように続ける。

解_初為_レ是 備_云云_二何因生_レ苦甚妄陋可_レ知 有人問就_ト略者亦謬也（『私記』）

まず、最初の『解』については「為是」として自分と同様の見解とみなし批判していない。因みに『解』の相当部分を見ると次のように注釈されている。

問阿修利ノ欲知由何而生ス下文ニ云三苦ニ所逼故ニ生ス於欲レ知ニト為レ滅レ苦ヲ因ヲ（『解』）

次に『備考』については「甚安陋可知」と痛烈に批判している。『備考』の相当部分を見ると以下のように注釈されている。

言「何因」者謂内外天。何因生レ苦。（『備考』）

『備考』はこの部分を、「三苦は依内苦と依外苦と依天苦から成る」というように、（三）苦を生ずる（原）因そのものについての話と勘違いして解釈している。本来は、なぜアースリに欲知が生じたかという（原）因を問題にした部分であるため、『備考』のこの注釈は明らかに間違っている。

次いで、問題の「有人」とだけ言及される法住『疏』の相当部分は以下である。

外問頌答如レ次可レ知。一部ノ顛末將レ釋「頌文」。先舉ニ外問。非ニ別ニ有レ人起ニ此難問。下竝准知セ。於レ中問辭頗略ナリ。（『疏』）

法住は『金七十論』では「外の問い」は誰か別の者が出てきて難問を言っているのではなく、「頌に存する答え」を示すためにあえて提示されることがあるといい、問いの部分は略して（問題にしないで）構わないとして、この問いに関して注釈を施していないのである。この点が快道にとつて「謬り」なのである。

②同じく『金七十論』第一頌（三苦所逼故 欲知滅此因 見無用不然 不定不極故）について、江戸時代には第一頌の三句目は「見無因不然」と伝わっている。「用」は宋・元・明の三本、「因」は高麗本によるのであるが、梵語原典から判断すると「用」が正しい。

この時代の「因」による解釈は原典からみれば正しくないのであるが、それに続く箇所では、快道はこれまで経験的に知られている苦を滅する手段（以下の引用文「彼」）は絶対的でも究極的でもないとして正しく説明した上で、次の後半部において「有人」の説を批判する。

彼^ハ唯世間淺近^ノ滅苦^{ニシテ}非^ニ出世至極^ノ之因^一有人擬^二因明^一約^{ニシテ}許不許^ニ非^{ナリ}（『私記』²⁴）

「有人」が因明に擬えて正誤を判断するのは適切ではないと快道は批判しているのであるが、これは法住『疏』の以下の部分を指している。

量曰。八分醫方等應不定滅苦因。不定不極故如世欲樂。唯眞實廿五諦即定極因也。（『疏』²⁵）

ここで法住は、絶対的かつ究極的な苦を滅する手段が、これまで経験的に知られていた「八分醫方等の手段」ではなく「サーンキヤの手段である二十五諦の知」であるということをも因明五分作法に従って立証しようとしたのである。それぞれ、「八分醫方等は應に定んで苦を滅する因にあらざるべし」が「宗」、「不定不極の故に」が「因」、「世の欲樂の如し」が「喩」、「唯だ眞實の廿五諦のみ即ち定極の因なり」が「結」となっている。

③『金七十論』第二頌²⁶の長行中に「二退失者。如皮陀中說。無故而帝釋及阿修羅王。為時節所滅。時不可免故。是法若滅盡。施主從天退。故有退失義²⁷。」とある。

これは、伝承されてきた聖典類（ヴェーダ）にも苦を滅する方法があるが、それらも究極的かつ絶対的なものではないとされる。その理由の一つとして、インドラ等の神々であっても、時節（ユガ期の終末）により滅せられ、施主も功德が尽きれば天より退くという、ヴェーダにおける「退失」（＝消滅）が挙げられている部分である。

快道はこの部分を注釈するに当たって、インドラ等の神々が時節という時の影響を免れない問題とヴェーダにおける施主の祭祀での功德が尽きて天から退く問題とを区別した上で、次のように述べている。

是則時來^{レハ}其^ノ因力^レ尽^ク故能修^ノ施主亦退^ス是拳^ニ所尊^ニ為帝釋等^ヲ以極^ニ釋余^一解^左時至^ニ与^ニ福力^尽二因^{トスルハ}非也
有人所為^レ天退故能為人亦退^下者不^レ順^ニ是法^ノ言^ニ不應^ニ滅^盡ノ語^一也（『私記』²⁸）

快道は「インドラ等が時節の影響を受けること」については「解釈の余りを極める」として、「ヴェーダにおける施主の祭祀での功德が尽きて天から退くこと」を重視していることが読み取れる。次いで『解』及び「有人」の説を取り上げて批判している。『解』ではヴェーダの祭祀による功德の力によって天に留まる果報を「福盡果」と称して以下のように注釈している。

一明^レ為^レ時^ノ所^{コトヲ}滅^ニ明^ニ福盡果^滅コトヲ^一是法^{トハ}者作^ニ馬祀法^ヲ或^ハ作^ニ于瑟遮^ヲ因^ニ是^ノ施力^ニ生^ニ天上等^ニ然^モ施
福盡^{レハ}則復退落^ス有^ニ此^ニ失^ニ故^ニ非^ニ滅^レ苦^ヲ因^ニ（『解』²⁹）

『解』が時の影響と功德の力が尽きる事を同等にとらえる点に、快道は異議を唱えているのである。「有人」とだけ言及される法住の『疏』には以下のようにある。

退失ノ證ノ中所レ祠諸天為ニ壞空等ノ時節ニ被レ滅。故能祠ノ人自有ニ退失一。如ニ樹若伐レハ則影隨滅⁽²⁰⁾一。

法住は、樹木を伐採すれば、それに付随する木の陰も同時に滅するという譬えを用いて、祀っている天（の神々）が時節により滅せられれば、それを祀っている人間もまた同時に滅するという持論を展開している。それに対して快道は法（快道によれば「ヴェーダに説かれた天に生ずるための祭祀とその果報」）に順っておらず、法住の主張は滅尽（果報が尽きて滅する）という言葉に相当しないと批判している。

また、「有人」についての他に、『私記』における特徴として、『金七十論』の本文について高麗本に言及し検討している点が挙げられる。『備考』や『疏』、『解』では、それほど言及されて来なかった問題であり、『俱舍論』の注釈書と同様、快道の厳密な検討の姿勢が伺える。

六、おわりに

以上、『金七十論私記』とその作者に関して検討し、構成や内容の特徴について見てきた。本稿においては『私記』の部分的な検討に留まったが、「有人」は法住を示しており、快道の『藻鏡』の形式と一致することから、この『私記』は快道によるものと考えて良いだろう。

『私記』の全体が残されていない事は残念であるが、初期の『金七十論』注釈書における共通的な知識や理解の変

遷等を明らかにするのみならず、快道の仏教外の書に対する研究姿勢を示す一助にはなるであろう。サンسكريット語文献を直接検討できる現代において、江戸期のこういった研究はすでに無用と断定することは簡単であるが、ただ忘れ去るのではなく、これらの研究をどのように捉え評価していくのかを通じて江戸期の学問研究のあり方を広く検証することが出来るのではないだろうか。現代の我々だからこそ、それが求められていると考える。

【註】

- ※本稿は『印度学仏教学研究』第六十三卷第二号（平成二十七年三月刊行）に掲載予定の「『金七十論私記』について」を詳述・加筆したものである。学会誌掲載に当たって、紙数の制約により大幅に割愛した部分を本稿にて補った。
- (1) 江戸時代における『金七十論』研究の概要については、拙稿「日本における『金七十論』とその注釈書について」（『仙石山論集』第二号、三十一～六十頁、二〇〇五年九月）を参照。
 - (2) 快道の経歴については、櫛田良洪博士著『眞言密教成立過程の研究』第三編第五章第一節「豊山教学の興隆（二）林常快道の活動」以下に詳しく、法住の怒りを買ったというのは考えにくいとされる。
 - (3) 『藻鏡』については、拙稿「日本における『金七十論』の注釈書——快道撰『金七十論藻鏡』を中心に——」（『印度学佛教学研究』第五十四卷第二号、五七二～五七五頁、二〇〇六年三月）を参照。また写本に関する情報（書写年代や所蔵等）は前掲拙稿「日本における『金七十論』とその注釈書について」を参照。
 - (4) 快道の『俱舍論』注釈書における記述については、拙稿「『俱舍論』におけるサーンキヤ説解釈の変遷」（『國學院大學紀要』第四十八号、一八一～二〇頁、平成二十二年二月）を参照。
 - (5) 『日本大蔵経（増補改訂）』第五十八卷「金七十論章疏」（昭和五十年）所収。
 - (6) 『埼玉図書館叢書第一篇』渡辺金造編、埼玉県立埼玉図書館、昭和七年。『金七十論疏操鏡』一巻もこの目録に見られる。
 - (7) 『続豊山全書』解題「豊山学匠著作目録」（昭和五十五年）三二六頁を参照。
 - (8) 田中海應編『豊山小史』（一九二四年）
 - (9) 『続豊山全書』解題「豊山学匠著作目録」（昭和五十五年）三二六頁を参照。
 - (10) 『続豊山全書』一「金七十論疏解題」（北條賢三、昭和五十五年）一八二頁を参照。
 - (11) 『数論二十五諦記』についての詳細な検討は、拙稿「『数論二十五諦記』について」（『仙石山論集』第四号、一～一五四頁、

- 平成二十年十一月)を参照。数論二十五諦記』は正式には『数論二十五諦記 解俱舍光記』という題名であり、写本の形で二
本現存するのみで、龍谷大学(今回取り上げる合本)と東北大学に所蔵されている。今日まで『二十五諦記』は注目されるこ
とがなく、『二十五諦記』には作者や成立年代などの情報が一切無かったが、一連の研究(前掲拙稿)によって、智山派の道
空(一六六六〜一七五一)によって書かれた『俱舍論光記講輯』(『智山全書』第十三卷所収)第三卷におけるサーンキヤ説
についての注釈の部分を抜粋・加筆し、『数論二十五諦記』という新たなタイトルをつけた独立の書に作り替えられたもので
あることが判明した。その中でも最も重要なのは、道空の『講輯』における指摘を受けて、『二十五諦記』において、サーン
キヤ理解について真諦と玄奘では相違があると示す点である。
- (12) 『備考』の著者、曉心嚴蔵(享保九年〜天明五年)。「真宗・大谷派」は滋賀県愛知郡の真宗大谷派の光沢寺に男子四人の中の
二男として生まれ、その後の経歴は未詳であるが越前丹生郡天津村の大谷派浄明寺の住職となった。『金七十論備考』三卷や
『勝宗十句義論試記』二卷を含むいくつかの著書がある。
- (13) 『日本大蔵経(増補改訂)』第五十八卷「金七十論章疏」(昭和五十年)所収。
『疏』の著者である智幢法住(享保八年〜寛政十二年)。「真言宗・豊山派」は大和国石上樸本に生まれ元文四年に快範に師事。
寛保元年長谷寺に登り無等に従って修学。智積院や南都諸寺に遊学し、安永二年一乘院法親王より岡寺を賜る。天明六年権僧
正に任ぜられ、寛政三年長谷寺第三十二世となる。同一二年没。『金七十論疏』三卷、『金七十論私記』二卷、『勝宗十句義
論記』二卷、『十句義決擇』五卷、『十句義教起因縁考』一卷、『十句義極微積集』一卷、『十句義論要義建集』一卷等を含
め多数の著書がある。
- (14) 『日本大蔵経(増補改訂)』第五十八卷「金七十論章疏」(昭和五十年)所収。
『解』の著者である香山宗明(生年未詳〜安永七年)。「真宗・本願寺派」は安芸高田郡高田原の本願寺派高林坊の住職。筑前
宗像郡岡邑の某寺に生まれた。博学で詩文に精通した。姪濱(福岡県早良郡)の医師である亀井聰因(南冥)は宗明を重んじ
支援した。聰因の子である道載が世に傑出したのは宗明の教育によるとされている。宝暦年間(一七五一〜一七五九)に高林坊に
入寺。宗学振興に尽力し『香山長語』『大経刪註』を著したが、本山が異解者として排斥したので、晩年は宗学を論じなかつ
た。寂滅の数ヶ月前に高林坊の失火により著作が焼失した。
- (15) 安永二年刊本を使用した。
- (16) 三苦所逼故 欲知滅此因 見無用不然 不定不極故(第一頌)
三苦所逼の故に、此を滅する因を知らんと欲す。
見る(がゆえ)に無用とするは然らず。不定不極の故に。
- (17) 三苦所逼故 欲知滅此因 見無用不然 不定不極故(第一頌)
三苦所逼の故に、此を滅する因を知らんと欲す。
見る(がゆえ)に無用とするは然らず。不定不極の故に。
- (18) 三苦所逼故 欲知滅此因 見無用不然 不定不極故(第一頌)
三苦所逼の故に、此を滅する因を知らんと欲す。
見る(がゆえ)に無用とするは然らず。不定不極の故に。

duhkhatrayābhigāṭajijñāsā tadabhihātāke hetau/

diṣṭe sā pārthā cemaikāntāryantato bhāvāu/1 (SK.1)

三苦の打撃から、それ(三苦)を滅する原因(手段)について知ろうとする意欲が生じる。

もし既に(経験的に)知られているからそれは無用であるとするなら、そうではない。というのも(既に経験されている手段は)絶対的なものでも究極的なものでもないからである。

(19) 『金七十論』卷上(大正蔵第五十四卷、一二四五頁上段十八〜十九行)

(20) 『私記』六丁表。

(21) 『解』卷上、一丁裏。

(22) 『備考』卷上(一〇八頁上段)

(23) 『疏』卷上(二三五頁上段)

(24) 一丁裏

(25) 『疏』卷上(二三六頁上段)

(26) 『汝見隨聞爾 有濁失優劣 翻此二因勝 變性我知故(第二頌)

見の如く、隨聞も爾り。濁と失と優劣と有り。

此の二因を翻するは勝たり。變と性と我との知の故に。

dr̥ṣṭavadamstravīkah sa hyaviśuddhikṣayātsayayuktah/

tadviparītaḥ śreyān vyaktāvyaktajñāvijñānau//2 (SK.2)

伝承されていること(手段)も、経験的に知られていること(手段)と同じである。というのも、それ(隨聞)は不淨、消滅、優劣を具えているからである。それと反対のものがより優れている。展開者と未展開者と知者とを識別するからである。

(27) 『金七十論』卷上(一二四五頁中段二十一〜二十四行)

(28) 『私記』十六丁表

(29) 『解』四丁裏

(30) 『疏』卷上(二三七頁上段)